

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

謠
曲
集
下

田中允校註

田中 允（たなかまこと）

大正二年三重縣生。昭和十二年東京大學國文學科卒業。青山學院大學教授。主著―校本四座役者目録、日本古典文學全集謠曲、アテネ文庫世阿彌、能樂鑑賞、古典文庫未刊謠曲集等。

日本古典全書

「謠曲集」下 田中允校註

昭和三十二年一月二十五日初版發行
昭和四十九年三月三十日第八刷發行

印刷所 株式會社精興社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九

州市小倉區砂津・名古屋市中區榮）

定價 八〇〇圓

目次

凡	例	三
本	文	七

五番目物（切能物）

殺生石	七	紅葉狩	五五
鳶	一三	船辨慶	六一
善界	二〇	海士	六八
皇帝	二五	當麻	六六
昭君	三〇	融	八三
鶴飼	三六	山祖母	九〇
松山鏡	四二	石橋	九七
黒塚	四九		

補	遺	一〇三
---	---	-----

謠 曲 集(下)

11

初番目物

弓八幡 一〇三

養老 一〇九

二番目物

簾 一二五

恒正 一三三

三番目物

半部夕顔 一四四

芳野閑 一四八

四番目物

雨月 一六六

木賊 一七三

櫻川 一八一

花形見 一八九

雲雀山 一九八

蟬丸 二〇四

老松 一二五

竹生嶋 一二〇

敦盛 一三七

双紙洗 一五四

雲林院 一六二

土車 一二二

花月 一二九

放家僧 一二四

一角仙人 一二三

滿仲 一二七

鉢木 二四五

橋辨慶……………二五四 求塚……………二七三

夜討曾我……………二五九 戀重荷……………二六〇

碓……………二六六

五番目物

國栖……………二六五 大會……………二〇二

春日龍神……………二九二 野守……………三一

鞍馬天狗……………二九七 猩猩……………三七

車僧……………三〇三

附 載……………三九

一、毛利本と上・中卷所載曲との校異……………三九

二、車屋本一覽……………三六

監修

高木市之助
山岸德平

久松潛一
小島吉雄

謠
曲
集

下

田中允校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

凡 例

一、故野上豊一郎博士舊藏、法政大學能樂研究所現藏の、車屋本百番（野上本と略稱）のうち、上巻には初番目物から三番目物までの四十二番を、中巻には四番目物四十三番を、それぞれ収載したので、下巻には、まづ、野上本の残り全部に當る、五番目物十五番を収載した。即ち、殺生石から石橋までの十五番がそれである。

二、謠曲の現行曲は、五流を通じて約二百四十番あり、一口に謠曲二百番とも言はれ、右の野上本百番では、現行曲の半數にも足りない。したがつて、本巻の餘白を借りて、野上本に漏れたもののうちで、名曲三十五番を、いづれも他の車屋本の中から選び、野上本の場合と同様五番立てに分類して、補載した。

三、車屋本として現在わかつてゐる諸本には、卷末の車屋本一覽表に示したやうに、整版本（整）古活字本（活）野上本（野）田中本（田）下間本（下）吉川本（吉）毛利本（毛）などがある。

四、右のうち、毛利本は中巻發行後に發見されたので、上・中巻分の毛利本との校異を、卷末に附載し

た。

五、毛利本は、毛利元公爵家舊藏、江島伊兵衛氏現藏で、五番綴二十冊、計百番の完本であるが、文字が大きめで肉太のものと、文字が小さめで肉細のものとの二筆に分けられる。したがって、全部が車屋道晰自筆とは考へ難く、肉太の方は野上本・田中本に近く、肉細の本は吉川本や戦災で焼失した曄道本の方に近い。車屋本の現存の寫本が意外に量が多く、且つそのすべてが同筆とは考へ難い。右の事實もあるので、從來の車屋本が果してすべて道晰の自筆かどうかは、可成り疑問になつて來る。しかし自筆か否かの問題はさて置き、内容的には、この毛利本も、まさしく車屋本の正系を傳へるものと認められるから、これを有力な車屋の一本として、他の諸本と校合することは、一向に差支ないと思ふ。

六、本卷所載五十曲の底本と、その校合に用ゐた異本とを示せば、次のやうになる。括弧内の一は始めが底本、以下が校合に用ゐた異本である。

殺生石（野・毛）鵠（野・整・毛）善界（野・田）皇帝（野・活・毛）昭君（野・活・整・下・吉・毛）鵜飼（野・整・下・吉）松の山鏡（野）黑塚（野・整・下・吉）紅葉狩（野・毛）船辨慶（野・毛）海人（野・整・田）當麻（野・整・下）融（野・整・下・吉・毛）山伯母（野・整・下・吉・毛）石橋（野・吉）

弓八幡(整・田・下・吉・毛) 養老(整・下・吉・毛) 老松(整・下・吉・毛) 竹生島(毛) 簾
(下) 經正(活・下・吉・毛) 敦盛(田・毛) 半菰(毛) 吉野靜(下・吉・毛) 双紙洗(吉) 雲林
院(下) 雨月(下・吉) 木賊(田・毛) 櫻川(田) 花筐(下・吉・毛) 雲雀山(吉) 蟬丸(下) 土
車(下・吉・毛) 花月(田・吉) 放下僧(下・吉・毛) 一角仙人(下) 滿仲(吉) 鉢木(田・吉)
橋辨慶(田・吉) 夜討曾我(下・吉) 碓(下) 求塚(吉) 戀重荷(吉) 國栖(下・吉二種) 春日龍
神(整・吉・毛) 鞍馬天狗(田・毛) 車僧(田・下) 大會(下・吉) 野守(下・吉・毛) 猩々(下・
毛)

七、右のうち、雲林院と蟬丸は底本とした下間本が本文を記すだけで、ゴマ節は勿論、「して」「わき」な
どの役名を始め、「次第」「一聲」などの註記や句點に至るまで、一切書き入れてゐないし、異本も
ないので、必要な註記は、すべて、雲林院は現行喜多流に、蟬丸は、現行金春流に基いて、編者が
補つた。また滿仲は、底本とした吉本が、詞の部分に殆ど全く句點を缺いて居り、異本もないの
で、この句點は編者の見識で補つた。

八、雲林院は、中巻で四番目物に入れた小鹽・西行櫻・遊行柳と同種の曲であるから、四番目物に入れ
る方が統一がとれるのであるが、小鹽以下の三番共、序之舞を舞ふ曲であるところに、三番目的
要素が濃く、わたくしはむしろ三番目物と見る方が穩當と思ふので、敢へて三番目物の中に入れた。

したがつて、小鹽以下の三番も、三番目物に入れた方がよかつたと思つてゐる。これらを四番目物に入れたのは、シテが男性であるから四番目物と見るべきだとの、野上博士の御意見に従つたからであつた。

九、校訂に際しての諸約束は、上・中巻の通りで、上巻凡例四・五・七、中巻凡例七・八・九に述べた通りであるから、ここでは省略した。

(一)毛本「わき詞」
 (二)越後の人。俗姓源。法名玄妙。
 字が玄翁。應永三年正月七日寂。
 (三)佛道に入つて修行してゐる人
 (四)悟りを開くべき修行の場。
 (五)悟りが開けないのを残念に思つて。
 (六)禪僧が主として持つ法具。獸毛または麻などを束ねて柄を附けた等身大のもの。
 (七)世間の有様を見て廻る。
 (八)今年の夏安居(げあん)ごと讀み、夏九十日間他出を禁じて専心修行する行事。當夏を冬夏と解すると、冬安居夏安居の意となる。
 (九)雲や水のやうに絶えず動いて諸國を行脚するわが身は、どこといふ定まつたあてもない浮世をめぐる旅にさ迷ひ行くのだが、さうした心の奥には何があるかわからないままに、陸奥の白河の水を掬つて飲みながら、霜結ぶ下野の那須野の原に着いたのであつた。
 「憂」は「浮」に通じ「雲」「水」の縁語。「奥」は「陸奥」の、「白河」は「知らず」の、「結び」は「掬ひ」の、「下野」は「霜」のそれぞれ掛詞。

殺 生 石

謠 曲 集

五 番 目 物 (切 能 物)

殺^{せつ} 生^{しやう} 石^{せき}

前シテ……………女(玉藻の前の化身)

後シテ……………殺生石魂(野千姿)

ワキ……………源翁道人

狂言……………能力

一 僧 詞 「是は源翁^二といへる道人^三なり。われ知識^四の床を立ち^五さらで、一大事を歎き拂子をうちふつて世上にまなこをさらす。此度は都にのぼり、當夏^{ハナタ}をもむすばばやと思ひ候。(道行)上^{ウヘ}雲水^{クモミヅ}の、身はいづくとも定^{さだめ}なき、く、憂世^{ウキヨ}の旅に迷ひゆく、こころの奥をしら河の、結びこめたるしもつけや、奈須野の原につきにけ

(一〇) 求めて命を捨てようとしていらつしやる。

(一一) 毛本「鳥羽の院」

(一二) 上童。宮中に仕へる年若い高級の女官。

(一三) 宮仕へをして高貴の人の中に交つてゐた身なのに。

(一四) 底本「たましむ」毛本による。

(一五) わけがあるからこそ。

(一六) あなたの様子や言葉のはしはしから見て、真相を知らないことはあるまい。

(一七) 「いや」と頭韻。

(一八) 「白露の」は「知らず」の掛詞、「玉」の序詞。

(一九) 底本「たましむ」毛本「玉しむ」

(二〇) 都を遠く離れた田舎に残つて「天離る」は「鄙」の枕詞でもある。底本毛本「あまさかる」現行

下懸諸流に随つて濁點を附けた。

(二一) 危害を今加へてゐるのだ。

(二二) 「爲す」と「那須野」の掛詞。

(二三) 苔の下に埋もれて、肉體は腐つてしまつたさうした跡にまでも

(二四) ものすさまじい秋風が吹き、

梟が松や桂の枝で聲を揃へて鳴き、狐が蘭や菊の花の間に隠れ棲んでゐると言つたやうな、この原の折

り。なすのの原に着きにけり。

(狂言石の上を飛ぶ鳥が落ちるといふ)して「なう／＼御僧其石のほとりへな立寄り

らせたまひそ。わき「そも此石の邊へよるまじき謂いはれの候か。して「是はなすの

の殺生石とて人間は申すに及ばず、鳥類畜類に至るまできはるに命なし。下へ

かくおそろしき殺生石とも、しろしめさで御僧おそうたちは、求め給へる命かな。「そ

こ立ちのき給へ。わき「さて此石は何故かく殺生をば至すらん。して「昔鳥羽

院ゐんのうへわらはに、玉藻のまへと申す人の執心の石と成りたるなり。わきへふ

しぎなりとよ玉ものまへは、殿上ゐみのまじはりたりし身の、此遠國とくごくに魂たまを、とど

めし事は何故ぞ。して「それも謂いはれのあればこそ、昔より申しならはすらめ。わ

きへ御身みみの風情ことばの末、まことを知らぬことあらじ。して「いや委しくは

いさしいせら露の玉藻のまへと、わきへ聞きし昔は都住る、してへ今魂たまはあまさ

る、わきへひなにのこりて悪念を、してへ猶も顯はす此野べの、わきへゆきき

の人に、してへあたを今、同上(歌)へなす野の原にたつ石の、く、苔こけに朽ち

にし跡までも、執心をのこしきて、又たちかへる草の原。物ものすさまじき秋かぜ

の、梟ふくろう松桂の、枝になきつれ狐、らんぎくの花はなにかくれすむ、此原の時しも、

からの風情は、ものすさまじい秋の夕べの気分そのままだなあ。白氏文集「梟鳴^二松桂枝^一、狐藏^二蘭菊叢^一」は「梟」は「吹く」の掛詞、「鳴きつれ」は「狐」と重韻。「時しも」「物すごき」は「も」の連韻。底本毛本「ふくろうせうけひ」

(五)「花」毛本「草」

(六)「同」底本なし。毛本で補ふ。

(七)氏素姓や経歴もよくわからず

(八)「知らず」の掛詞。

(九)底本「紅色」毛本による。

(一〇)「事」の宛字かも知れない。

(一一)佛教儒教や和漢の學才を始め

(一二)音楽。毛本「くはけん」

(一三)心の底まで曇りなく、何事にも明るいと言ふので。

(一四)底本毛本「くはけん」。「客」

「堪能」などと「か」の重韻。

(一五)もまだ出ない宵のうちで、空の雲の氣配もものすごく。

(一六)底本毛本「さはき」

(一七)内裏。宮中。

(一八)清涼殿の東廂の南の隅に立てられた四季の繪の屏風。底本毛本「くはと」

(一九)清涼殿の北、弘徽殿と藤壺との間にある室の名。

物すごき秋の夕^{ゆふべ}かな。

わき「猶^二玉ものまへのいはれ^一懇^{ねんごろ}に御物語り候へ。(クリ)同上^{二六}へ抑^{おさ}こ

の玉藻の前と申すは、出生^{二七}出世さだまらず、いづくのたれともしら雲の、うへ

人たりし身なりしに、してさしこゑ^{二九}然れば好色をこととして、容顔美麗たり

しかば、同下^帝へ御門の叡慮淺からず。して^{三〇}へある時玉ものまへが智恵をはかり

たまふに、同^{三〇}へ一字とどこほることなし。經論^{三二}聖教和漢の才、詩歌^{三三}管絃^{くわげん}にいた

るまで、とふに答へのくらからず。して下^{三三}へ心底くもりなければとて、同^{三三}へ玉

もの前とぞ、めされける。(クセ)下^{あるとき}へ有時みかどは、清涼殿に御出^{ぎしゆつ}なり、月卿

雲客^{かく}の、堪能^{かんのう}なるをめし集め、管絃^{三三}の御遊^{ぎよ}ありしに、比は秋のすゑ、月まだ遅

き宵の空の、雲のけしきすさまじく、うちしぐれふくかぜに、御殿のともし消

えにけり。雲の上人立^{三六}ちさわぎ、松明^{しょうめい}とくとすすむれば、玉ものまへが身より、

ひかりをはなちて、清涼殿を照らしければ、光、大内^{三七}にみち^{三六}て、畫圖^{三六}の屏

風^{三九}萩^{かき}の戸、闇^{四〇}の夜のにしきなりしかど、ひかりにかかやきて、ひとへに月のご

とくなり。して上^帝へ御門^{四二}それよりも、御惱^{ごなう}とならせ給ひしかば、同^{四二}へあべの、

康成^{四三}うらなつて、勘狀^{かんじやう}に申すやう、是はひとへに、玉藻のまへが所爲なれや。

(四〇)「闇の夜の錦」とは、美しいものが暗いために見えない譬へ。

(四一)御病氣。

(四二)安倍泰成。陰陽家。安倍晴明七世の孫と傳へる。

(四三)占つた結果を勘へ調べて作つた報告書。

(四四)天皇の政治をひつくり返さうとして。底本「かたふけんと」毛本による。

(四五)惡魔調伏の儀式を行ふべきだ(四六)「爲す」と「那須野」の掛詞。

(四七)石の精なのです。

(四八)晝間は明るくてあさましいから、立ち歸り。「晝」「淺(朝)」

「夕」「夜」は縁語。「淺間の夕煙の」は「立ち」の序詞。「淺間」は明るい意の「あさま」及び「あさまし」の掛詞。

(四九)懺悔の姿。罪を悔い改めた姿。

「懺(三)」「夜(四)」「夕(五)」

「闇(八)」「燈火(十)」は數韻。

(五〇)「言ふ」と「夕」の掛詞。

(五一)夜を明かしてゐると、月が出て今夜は明るくなる。」「夜は明

し」は「夜を明かす」意と「夜が

明るい」意とを掛け、「夜」と「明し」とは「燈火」の縁語。

王法をかたむけんと、化生して來りたり。てうぶくの祭有るべしと、奏すれば
たちまちに、叡慮もかはり引きかへて、玉も化生をもとの身に、なすのの草の
露と、消えし跡はこれなり。

わき「扱扱かやうに語りたまふ。御身はいかなる人やらん。して「今は何を
かつつむべき。われないにしへは玉ものまへ、今はなす野の殺生石の、其石魂に
て候なり。わき「勝やあまりの惡念はかへつて善心となすべし。おなじくは本
躰を二たびまみえ給ふべし。して「あら恥かしや我姿、ひるは淺間の夕煙の、
同上(歌)「立ちかへりよになりて、／＼、さんげのすがた顯はさんと、ゆふ、
闇のよの空なれど、このよはあかしともし火も、わが影なりとおぼしめし、恐
れ給はで待ち給へと、石にかくれ失せにけりや、石にかくれ失せにけり。(中
入。狂言、玉藻の前が殺生石となつた事を語る)

わき「木石ころろなしとは申せども、草木國土悉皆成佛と聞く時は、もと
より佛躰具足せり。いはんや衣鉢をさづくるならば、成佛うたがひ有るべから
ず。石にむかひて佛事をなす。下「汝元來殺生石、「問ふ靈石いづれの所より
來り、今生かくのごとくなるきう／＼にされ／＼。下「自今以後、汝を成佛せ

(五二)「燈火」と縁語。

(五三)「思し召し」と頭韻。

(五四)「石」は「音ひ」の掛詞。

(五五)白氏文集「非三木石皆有情」

十訓抄一の九「心なき石木までもに

も、かく思ひ知るむねを顯すなり」

(五六)中陰經から出たと傳へられる

四句の偈文に「一佛成道、觀見法

界、草木國土、悉皆成佛(一佛が

成道して法界を觀見すれば、草木

國土悉く皆成佛せん)」

(五七)木や石にも元來佛となるべき

本體が充分に備はつてゐるのだ。

(五八)引導を渡すならば。

(五九)供養をする。

(六〇)以下「攝取せよ」まで殺生石

に引導を渡す詞。本朝高僧傳三六

玄妙傳に「妙一日行對石曰、汝元

來頑石頭、性從何來靈從何起」

(六一)靈のある石に尋ねるぞ。

(六二)現世でこのやうな状態にある

のか。大至急退散しろ。退散しろ。

(六三)佛として完全な身にしてあげ

よう。毛本「善心」それならば、

善なる心の佛にしてあげようの意

となる。

(六四)受け入れてくれ。

(六五)「後」底本毛本共なし。

しめ、本覺眞如の全身となさん。攝取せよ。(出端)後して石に精あり。水に

音あり。かぜは、たいきよにわたる。同へかたちを今ぞ、顯はす石の、ふたつ

にわるれば、石魂たちまち、顯はれ出でたり。おそろしや。

わきへふしぎやな此石ふたつにわれ、光の内をよくみれば、野干のかたちは

有りながら、さもふしぎなる仁躰なり。してへ今は何をかつつむべき、天竺に

ては斑足太子の塚のかみ、大唐にては幽王の褒姒后と現じ、わが朝にては鳥羽

の院の、玉もの前と、成りたるなり。「さても我王法をかたむけんと、かりに

遊女のすがたと成つて、玉躰に近づき奉れば御惱となる。則ち御命をとらんと

よろこびの色をなすところに、下へあべのやすなり「調伏のまつりを始め、壇

に五色のへいはくをたて、玉もに「御幣を持たせつつ、へ肝膽を碎き祈りし

かば、同上へやがて五躰をくるしめて、へいはくを追つとりとぶ空の、

雲ぬにかかり海山を、こえて此野にかくれすむ。して下へ其後勅使たつて、同

下へへ、三浦のすけ、かづさのすけ、兩人に綱旨をなされつつ、奈須野の化

生の者を、退治せよとの勅をうけて、野干は犬に似たれば、犬にて稽古、ある

べしとて、百日いぬをぞ射たりける。是犬追物のはじめとかや。して下へ兩介

一

- (六六)底本「せむ」毛本「せい」
 (六七)風は虚空に吹き渡る。「風」は「形」と頭韻。
 (六八)狐の異名。
 (六九)人體の宛字。人間の形だ。
 (七〇)仁王經護國品・曾我物語卷七・神明鏡などに見える人。
 (七一)史記・平家物語卷二・神明鏡に見える人。毛本「きさき褒姒」。
 (七二)「掌中の玉」の意を掛けた。
 (七三)底本「ふけむ」と毛本による。
 (七四)「優女」の宛字かも知れぬ。
 (七五)「立て」と頭韻。
 (七六)謡曲拾葉抄所引の海藏寺開山傳には、三浦の介義明・千葉の介常胤・上總の介廣常の三人、本朝神社考卷六では、三浦の介義純・上總の介廣常の二人となつてゐる。
 (七七)勅命をお下しになり。
 (七八)馬に乗りながら犬を追ひかけて射止める遊藝。鎌倉武士が好んだ。「犬」「射」「犬追物」は頭韻。
 (七九)取り圍んで。
 (八〇)狐はその身をどう隠しやうもなく。「那須野」は「なす」の掛詞。
 (八一)底本「をふつ」毛本「をうつ」
 (八二)狐を追ひ込む溝に追ひ込んで
 (八三)「命」と頭韻。

はかりしやうぞくにて、同下へく、數萬騎なすのを取りこめて、草をわかつて狩りけるに、身を何となすのの原に、顯はれ出でしをかり人の、追うつまくつさくりに付けて、矢のしたに、射ふせられて、即時に命をいたづらに、奈須野の原の露ときえても、猶執心は、此野にのこつて、殺生石となつて、人をとる事たねんなれども、今逢ひがたき、御法をうけて、この後惡事をいたすこと、有るべからずと御僧に、約束かたき、石となつて、やくそくかたき石と成つて、鬼神の姿は失せにけり。